

コルベ神父

友のためにささげたいのち

千葉茂樹 著

矢車 涼 絵



コルベ神父

友のためにささげたいのち

千葉茂樹 著

矢車 涼 絵



女子パウロ会

父科へハレ

さのりおせちちこせいのま
ま 昭和十一年
三月 出版



もくじ

はじめの章 コローマ教皇とコルベ神父 7

第一章 幼年時代 22

- 1 ポーランドの片田舎で 24
- 2 三人兄弟 28
- 3 母とライモンドのゆめ 32
- 4 小島と話す聖フランシスコ 37
- 5 神さまのみちびき 34
- 6 天国までの距離 40
- 7 もっと高くなるろう 47

第二章 聖母の騎士たち 52

- 1 コローマの七年間 54



- 2 神さまの道具 64
- 3 おかしな修道士ゼノさん 72
- 4 ニエボカラノフ・聖母の町 78
- 5 もつとアツカイ希望 86

第三章 日本での働き 97

- 1 マリアさまの推定 94
- 2 我々のささげもの 101
- 3 コルベ神父と会った人びと 110
- 4 苦しみとめぐみと 121
- 5 神はどこにいるか 126
- 6 残されたもの 126

第四章 天国への道 135

- 1 ヒトラーとの戦い 136

- 2 アウシュビッツ強制収容所 143
- 3 夏の日のできごと 148
- 4 地下牢の二週間 159
- 5 二つの冠 163

終わりの章 わたしたちへのメッセージ 169

- ◇奇蹟の生存者 169
- ◇平和をつくる人 173

あとがき 179



はじめの章

ローマ教皇とコルベ神父



いま、吹雪の晴れ間をぬって、よく澄んだ明るい声が聞こえてきます。

「みなさん、この雪こそ大きなめぐみです。この雪と寒さによって、わたしたちは、かつてキリシタン時代の殉教者（神への愛と信仰を知らぬいて、いのちをささげて死んだ人）があゆまれた苦しみをともに味わうことができましたのです。」

みなさんも、よくこの寒さをこらえてくださいました。神にかんしゃ——」

その声の主人はだれか、みなさんはおわかりですか。歴史上はじめて、わたしたちの日本をおとすれたローマ教皇、ヨハネ・パウロ二世その人です。

一九八一年、昭和五十六年二月二十六日。

その日、九州長崎にはあずらしく、六十年ぶりの大雪が、朝からふりつづいていました。

ところが、長崎市のなかほどの歌山にある市営競技場には、このローマ教皇みずからとりお

こなる殉教者（殉教者）とたたえ、記念する（こころ）に参加しようとして、五万人もの人びとが朝早くから集まっていたのです。

吹雪のなかで、三時間以上も立ちどろした人びとに向かって親しく、力強いことばをかけたヨハネ・パウロ二世――。

ローマ教皇が、長崎にとどまっていた足かけ二日のおそい予定のなかで、聖母の騎士修道院への訪問があったのです。

その修道院は、長崎市のはずれにある深山のふもと、本河内ダムをのぞむ斜面に建てられていました。ローマ教皇が到着したとき、雪はまだふりつづいていました。

歓迎アーチの前では、聖母の騎士学園の少年たちが、全員でプラスチックを演奏して、教皇をむかえたのです。その姿をみて、ヨハネ・パウロ二世はたちまち笑顔をみせて立ちどまり、しばらくのあいだ演奏に聞き入りました。

「親愛なるみなさん、わたしは、いま喜びでいっぱいです。なぜなら、わたしと同じポーランド人であるマキシミアノ・コルベ神父がはじめられたこの修道院をたずねることは、ずいぶんまえからのわたしのとくべつの望みだったからです」

大聖堂に入ると、ヨハネ・パウロ二世は、そこで待ちうけていたおおぜいの人びとを前にして、とてもうれしそうにあいさつしました。そして、「キリストが示された愛の姿をそのまま実行されたコルベ神父をじかに見習うために、わたしはこの修道院をたずねたのです」とつけくわえたのです。

では、キリストが示された愛を、そのまま実行したコルベ神父とは、どんな人なのでしょうか。また、ローマ教皇が、その生き方を見習うために、わざわざこの地をたずねたというのは、どういうことなのでしょう。それほどコルベ神父という人の生き方が、ローマ教皇にもあつち、人びとの心をとらえているのは、なぜなのでしょう。

大聖堂のあいさつのあと、ヨハネ・パウロ二世は、コルベ神父を記念してつくられた小聖堂へと向かいました。そこには、日本で元気に働いていたころのコルベ神父の大きな秘密がかがつてあるのです。ヨハネ・パウロ二世は、その肖像画の前にひざまずき、しばらくのあいだ無言で祈りつづけました。

このとき、ローマ教皇の予定はもう二十分もおくれています。まわりの人びとは、それを心配しています。でも、それにはかまわず長いこと祈っていたのです。それほど、ヨハネ・パウロ二世は、コルベ神父への愛と尊敬を強くもっていたといえるでしょう。

そのあと、中庭に出たローマ教皇は、そこに建てられたブロンズのコルベ神父の像の前に、白と赤のカートネーションの花輪をささげました。その白と赤の色は、キリストを見習って生きる者にとっては、とても意味が深いものです。白はけがれのない純潔のしるしであり、赤はいのちがけの信託、殉教者のしるしだからです。

さいごに、ローマ教皇が立ちよつたのは、コルベ神父の資料室でした。そこには、およそ五十年まえ、昭和のはじめにコルベ神父が日本で働いたころ使っていた美しい木造の一座が残されています。小さな部屋のなかには、すべて手づくりの机やいすなどが、当時のまま残され、まるでコルベ神父がきのうまで、そこに働かずに仕事をしていたかのようです。

ヨハネ・パウロ二世は、吉びてすり切れないすにすわりこみました。机の正面には、コルベ神父の大きな写真がおかれています。

美しいフランシスコ会の修道服に、白いローブをベルトがわりにしめた一人の神父さんの姿がそこに写っています。顔は、日本人によくみかけられる坊主がりに黒ぶちのめがねをかけ、広いおでことひきしまったはもと、そしてあごひげがとても印象的です。めがねごしの目はやさしい光をたたえて、ある一点をみつめています。

コルベ神父は、一九三〇年から一九三六年（昭和五年から十一年）までの六年間、この質素な部

屋でまいにち祈り、そして働きつづけたのです。しかし、およそ半世紀後のきょう、この部屋にローマ教皇がたずねてこようとは、さすがのコルベ神父も考えてみなかったことでしょう。

一方、ヨハネ・パウロ二世じしんは、ここでどんな思いをいだいていたのでしょうか。

「コルベ神父は、この長崎の地に自分の骨をうめたかったにちがいない。それほどまで、日本と日本人を愛していた……。しかし、神はそれ以上に大きな働きをコルベ神父にあたえられたのだ……」

大きな働きとは、どんなことだったのでしょうか。

ヨハネ・パウロ二世の心には、いつも燃きついている一つの情愫があるのです。それは、祖国ポーランドに残されたアウシュビッツ強制収容所あつた。その一隅にある第十一監房の地下牢……。ヨハネ・パウロ二世は、その地下牢をなんどもたずねたことがあります。ローマ教皇になってからも、またそのまえにも、地下牢への階段をおりていき、コルベ神父のことをくり返し考えてきたのです。

日本における六年間の働きあつた、教皇ポーランドへもどったコルベ神父は、この地下牢で亡くなりました。それは、ナチス・ドイツ軍によって捕らえられ、アウシュビッツ強制収容所に入れられていたときのことです。